414
A 695

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

朝鮮国交通維持之方法ニ付上申候

朝鮮ニ我意ニ應セサルモノハ往々我邦ニ疑惑ヲ容ルニ
アラス彼国之事佛艦ヲ獨リ我船ヲ傷シヨリ幕府
之カ中保ヲ名トシ使員ヲ派シテ尋交ヲ修ントスルヲ
朝鮮ニ告シメシニ彼レ幕府使ヲ来スノ先例ナキヲ以テ
辞ス蓋シ之ヲ辞スルハ只ニ先例ノ有無ノミニアラス幕府
佛ト親係彼レヲ狙ヒ内トセンノ意アラン事ヲ疑フ
其疑ヒ奇ノモノハ對人交際ノ設ヲ訊シ自己ノ貿利ヲ
逞フセントセシカ故也是ヨリ如キ事ヲ為ス二係ハ支出ス宜敷

邦ヲ懼ルハ佛郎ヲ怪ルハ所以也粤ニ成底ヲ
朝廷宗氏ニ令シテ太政官ニ達ス之狀及国事次第ノ
事ヲ告シムルニ詞ヲ字句之間ニ章ノ末ニ施シ以テ之ヲ
擯ス蓋シ前ノ幕使ヲ排セシノ意ト同一轍ニシテ毫
茲ニ葛藤ノ基ヲ開キ往復数年解之益紊ル諭之
ハ称斥ヲ終ニ壬申ノ秋宗氏ノ旧約中ニ有ル所ノ
慶尚掌梁公館ハ外務省ノ所轄ニ属シ移義所ノ役
員等ヲ去止黜陟シ菊西ヲ更メタルハ仮メリ無シ猶旧約
ノ存スヘキヲ保テ以テ尋盟高量ヲ見徹シ彼ニ告シテハ
必ス他日別格之使員ヲ渡シ尋交ヲ商議シ両国ノ安全ヲ

謀ルヘキ旨ヲ示シ堅耐以テ今日ノ地位ヲ占ム今也
朝廷將サニ為スヘキ所ノモノハ宜シク方畧ヲ定メ使員ヲ派
シテ之ヲ説解スルノ他ナカルヘシ無シ尚崖々使員ヲ派スルノ
時ニアラサルト為サハ一彌縫ノ策ナカルヘカラス夫今ノ朝鮮
ハ往昔ノ朝鮮ニアラス今ノ業別モ亦旧古之業別ニ非ス
然レ共彼ノ信シ且尊ム所ノモノハ日本ニアラス又業別ニ非ス独リ
宗氏アルノミ宗氏ノ朝鮮ニ於ル安南ト若年移義ト同
ク戦アリ私闘アリ或ハ絶ス或ハ尋キ就中慶長之乱後
元和ニ和講ニ至リ其間ニ使臣ノ往来シ又自ラ海航彼ノ
都府ニ入リ身命ヲ抛テ両国ノ福ヲ議ル実ニ宗氏ノ力

因ラナルナシ故ニ朝鮮ノ我ヲ敵視シ不共戴天之讎トセシモ平免解帯シテ信使ヲ來リ久シク歳遣ノ約ニ違ヒ
二心德ヲ唱ヘシハ宗氏ノ旧情不可破旧交不可断所以彼
之信ヲ且依敦スハ所也蓋シ彼ノ国体西不失禮東不失
信之義ニ因ハ外ナラン乎然ルニ戊辰年来宗氏ノ自専猶
紛々タリト雖尚昔日ニ比スレハ三分ノ一ヲモ盡セリトセン而シテ
特ニ外務ヲ亟ニ任シ渡韓ノ
朝命ヲ承一家欣抃ハ是サントスルノ意ヲ決シ職掌將
二發セントスルニ當リ
朝家之ヲ止ム其後日氏モ自ラ
不幸ヲ悔ヒ慨息不止ト雖モ亦如何ニスルナシ今ヤ政府

誠ニ彼レヲ説明センヿヲハ宜シク旧交ノ素アルヲ以テ宗
氏ヲシテ渡韓セシムルヿヲ説ニ旧情ヲ以テシ諭スニ誠信ヲ
以テス是解難ノ道ナカラシメ因テ宗氏ヲシテ自ラ渡韓
ヲ命セラレ度其目的左ノ如シ
一今宗氏ヲ流スハハ使者ノ名義ヲ用ヒ第二其家
人其ヲシテ國事ヲ告シニ彼レ曰其先ハ所正ニ了
承セリ然レトモ其回答ノ期限ハ豫メ決スヘカラスト應
答數回其空ニ帰リ其事ヲ報ス茲ニ
朝廷議スルヿ所ヲ
朝廷今国使ヲ送ルヿ
及ヒ彼若シ之ヲ待ツニ乏ク失スルヿヲ恐レハ

両国ノ乱階ニ関セン歟不測ノ誠哉予ノ朝鮮ニ於ハ
情誼厚キ如シ実ニ侍従吟味ニ堪ヘス然レトモ再ヒ使人ヲ
遣シ此旨ヲ告ルモ彼尚疑ヲ容レス之ニ応セサルハ事勢ニ
至ルヘシ因之同盟ノ情ヲ
朝廷ニ表シテ自ラ渡海セリ蓋ハ予カ微衷ヲ納レ両
国之福ヲ祈レトイフ之趣意ヲ専ラニスヘキ事
右之順序ヲ以テ舒ク待罪ヲ俟ス共今日形行容易
ニ聽セシムル難シ且数回数月公幹ノ順序ヲ待サルモ
敢テ薄切果激ノ説ヲ不用強テ速ヤカニ機ヲ窺ヒ到底
御意ノ空敷スルハヲ期ス此目的ヲ定ムルハ寸ハ

一宗氏ハ火輪船ヲ不用和船ニテ渡海スヘシ
一可成古風ノ艤装ヲ施シ彼ノ疑惑ニ渉ラサルヲ
要スヘシ
一官員悉ク彼ニ精疑ヲ抱キ付添スヘシ
一往来ノ書簡中私好ヲ通シ彼ヲ面喜意ヲ伝セシ
類別ノ士人一両名ヲ撰ミ宗氏ノ付員タラシメ
所謂好ヲ以テ好ヲ誘フノ策ニ出ルヘシ
右ヲ以テ特長ヲ専ラトシ解疑ヲ面スルハ寸ハ早効ヲ約
シ容ルヘカラス肝ヲ腐スヘシ夫此要ヲ於廟堂ハ内整外飾
スルハノ時至ルヲ之ノ方策トスハハ勿停草梁ヲ解景如ク

権ヲ行ヒ来リシ地ヲ拝受シ今日ノ家屋ヲ書面ニ書ラ
ミ通便ヲシテ解錠セシムハド着倣シテ可也事ニ要ス両
得ノ方法ヲ以上

七年一月十一日

森山茂